

研究課題：複合動詞自他交替の記述・理論研究

本研究は、複合動詞の自他交替現象の記述研究と理論研究から構成される。以下、順にこれら 2 つの研究成果を述べる。なお、複合動詞の自他交替とは、次のような自動詞と他動詞のペアが見せる形態統語的・意味的な振る舞いのことである。

(1) 太郎がポスターを折り曲げた。／ポスターが折り曲がった。

複合動詞の記述研究における主な関心事は、複合動詞がどのような動詞から構成されているかという組み合わせの問題である。これについて様々な一般化が提案されているが、最も知られているのが影山 (1993) による「他動性調和の原則」である。ところが、この原則には例外があることが知られており、それらを包含すべく影山 (2002) では「非対格他動詞」というカテゴリーが提案された。これに対し、本研究では非対格他動詞というカテゴリーが存在しないという主張を行い、これに伴って影山 (2002) が示唆する「非対格＋非対格」の新たな複合動詞の 3 つの組み合わせも同様に存在しないと結論づけた。具体的には、影山 (2002) が非対格他動詞の候補として挙げた「出す」を対象に、日本語においては外項が遊離した数量詞によっては量化されないという数量詞遊離の特徴 (影山 1993) を利用したデータを提示した。そのデータによれば、いずれも「たくさん」という遊離数量詞が他動詞文の主語を量化しないため、その主語は外項であることを強く示唆するものだった。たしかに、影山 (2002) が主張するように、受身文にできないという特徴も外項が存在しないことを示唆するものだが、受身文と不整合であることの要因は外項の不在以外にも考えられ、本研究では主語と目的語の「部分全体関係」がその主たる要因であることを示した。

複合動詞の理論研究では、語彙主義と反語彙主義の対立する 2 つのアプローチが存在する。とはいえ、後者は前者を母体として生じており、本研究も前者の知見を土台として、後者のアプローチを採用している。なお、動詞という語に対しても句と同様の統語構造を仮定するアプローチが反語彙主義の 1 つの特徴である。本研究は、語彙主義研究において初めて提唱された「様態・結果の相補性仮説」(Levin and Rappaport Hovav 2010) の観点から語彙的複合動詞の統語構造を提案した。この仮説それ自体は単一の動詞 (語根) に対する制約を述べたものであるため、複合動詞という複数の動詞語根に関わる単位に対して行われた研究はほとんど知られていない。しかし、本研究では相補性仮説から複合動詞の統語構造を検討することで、語彙主義研究が明らかにしてきた語彙的複合動詞の語彙的緊密性について新たな観点を提供した。具体的には、「再び」という副詞が共起する述語によって復元読みと反復読みを生じさせるという特徴を利用し、データを提示した。このデータによれば、「押し開ける」などの語彙的複合動詞を構成する 2 つの語根が構造上別々に位置 (「押す」が様態に、「開く」が結果に位置) するのではなく、姉妹関係に位置し、複合語根を形成することが示唆された。つまり、語彙的複合動詞は形態的には複雑ではあるものの、統語的な振る舞いは単一語根と同様であり、意味的には様態と結果の両方を含むにもかかわらず統語的には様態あるいは結果の位置にしか生じないと思われる。これは、2010 年以降の相補性仮説の解釈 (Beaver and Koontz-Garboden 2020, Ausensi 2021 など) と整合的であり、この仮説を出発点として複合動詞の理論研究が発展する可能性を示した。

以上が本研究成果の概要である。